

[特別支援教育]

## 通常の学級における要支援児童への自立活動の 視点をもった教科学習の実践

渡邊 敦\*

### 1 問題の所在

我が国においては、「障害者の権利に関する条約（以下「障害者権利条約」という。）」に掲げられている教育の理念の実現に向けて、特別支援教育が推進されている。しかし近年、通常の学級で学んでいる発達障害の可能性のある子供を含む障害のある子供が増えてきている。文部科学省から提示された通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査では、全国の公立の小・中学校の通常の学級に在籍する児童生徒の8.8%が学習面又は行動面で著しい困難を示していることが分かった（文部科学省，2022）。この調査は2002年，2012年に続き実施されたものであるが，特別支援教育への理解が高まってきていることもあり，この数値は増加を続けている。

齊藤（2020）は，米国における「特別な教育」の位置づけが時代とともに変遷し，現在では，「通常の教育」と「特別な教育」が融合し，すべての子どもの学びを支える仕組みとして「学校全体で取り組む多層的な支援システム（MTSS: Multi-Tiered Systems of Supports）」が普及しているとし，カンザス州で開発されたモデルを参考に，我が国における「多層的な支援システム」のモデルを作成した。「多層的な支援システム」では，全ての子どもを対象とした分かりやすい授業などの1次的な取組，配慮を要する子どもを対象とした個別の支援などの2次的な取組，集中的な支援が必要な子どもを対象とした密度の高い指導を行う3次的な取組について示している。

通常の学級における指導や支援については，これまでも集団における指導や，特性や困難さに応じた個別の指導の両面からの支援の充実が求められてきた。また，全ての子どもが分かりやすい授業としての授業のユニバーサルデザイン化や，インクルーシブ教育システムの構築・充実に向けて，学び合う集団を形成する取組が重要視されてきた。その結果，それらの取組が様々な研修等を経て，通常の学級において一般化してきた。これらは齊藤（2020）の「多層的な支援システム」に当てはめて考えれば，全ての子どもを対象とした1次的な取組が多い。また，密度の高い指導を行う3次的な取組が小・中学校において特別支援学級や通級指導教室で行われるとするならば，小・中学校の通常の学級においては，8.8%いるとされる要支援の子どもに対して行う個別の支援などの2次的な取組の質や，支援後の評価と改善策への理解を高めることが今後の課題だと考えられる。

2017年の学習指導要領の改訂では，個別の教育支援計画と個別の指導計画を特別支援学級に在籍する児童生徒及び通級指導教室に通う児童生徒に対して，作成することが示されるとともに，通常の学級に在籍している通級指導を受けていない障害のある児童生徒についても，個別の教育支援計画及び個別の指導計画の作成と活用に努めることとされた（文部科学省，2017）。

これらのことから小・中学校の通常の学級の担任も，学級に在籍する要支援の子どもに対して，個別の指導計画を作成し，効果的な個別の支援をする必要があると言える。そこで，子どもの実態を把握し，効果的な支援を検討する際に，担任の個人的な経験から根拠なく行うのではなく，複数の教員による実態把握と自立活動の6区分27項目に照らして考えることで，より効果的な個別の支援が実現できると考える。

西村（2025）は，特別支援学級において自立活動の指導の充実を図るため，複数人の教員による実態把握から作成した自立活動メニュー表の活用を行った。通常の学級に在籍する子どもに対する個別の支援でも，正確な実態把握と，よりよい支援の検討が必須なことは変わらない。ただし，教育課程上，通常の学級に在籍し，通級指導を受けていない子どもに対して自立活動の授業時間を設けることは難しい。そのため，自立活動のメニュー自体を決めるのではなく，自立活動のメニューを決定するまでのプロセスを，支援内容や支援方法の検討に活用したい。

\*糸魚川市立能生小学校

上記のことを踏まえ、本研究では、通常の学級担任の、要支援児に対する効果的な個別支援の充実を目的とし、西村（2025）の実践を参考に、複数の教員で実態把握を行い、自立活動の視点をもって通常の学級の教科指導において行う支援を検討し、それらを共有する個別の指導計画を作成する。それを基に支援を継続した結果、児童がどのように変容したかを、授業の取組や生活の様子をもとに考察する。なお、在籍校校長と対象児保護者より研究推進の承諾を得た。

## 2 研究の内容・方法

(1) 対象児 通常の学級に在籍する要支援の小学5年生男児2名（以下、A児とB児とする）。

### ① A児

A児との関わりは5年生の担任として始まった。年度初めからA児は学習意欲が低く、課題遂行に困難さがあると感じていた。また、友達に好かれているが、友達に頼りすぎている場面が多くあった。A児は言語障害通級指導教室で発音の指導を受けていたが、関わった頃には発音の目標は達成されており、会話における違和感はなかった。

### ② B児

B児との関わりも5年生の担任として始まった。比較的大人しい印象で、積極的な挙手や発言はなく、困り感を表に出すこともなかった。しかし、単元テスト等での誤答が多く、学習不振の実態があった。前年度からそのような様子があったことから、4年生の3学期から発達障害通級指導教室で指導を受けはじめた。

今年度の6月の始め頃、本人が「4年生の頃から学習（特に算数）が分からずに辛い。」ということを保護者に伝え、登校渋りが始まった。

(2) 期間 令和7年5月～9月

(3) 方法

### ① 複数の教職員による簡易版実態把握図を用いた実態把握

実態把握のための観察は担任である筆者と教科担当（算数）、通級指導教室の担当で実施した。観察者が多いほどA児・B児について多くの実態を集め、正確な実態把握が行うことができる。しかし、学校の実態を踏まえ、実際に取り組みが可能な前述の3名（以下観察チーム）で行うこととした。令和7年6月2日～6月6日の1週間を集中して実態把握を行う期間とし、対象児を観察して行動や学習の様子の情報を収集した。その後、観察チーム3名で集まり、情報を集約し、引場（2025）の実践を参考にして簡易版の実態把握図を作成した。

### ② 実態を自立活動の内容に照らして整理した個別の指導計画作成

対象児の実態を把握し、効果的な支援を検討する際に、担任の個人的な経験から根拠なく行うのではなく、複数の教員による実態情報を自立活動の6区分27項目に照らして考えることで、より効果的な教科学習における個別の支援が実現できると考える。

簡易版実態把握図を用いて見えてきた実態を、西村（2025）の実践を参考に、自立活動の内容6区分27項目に照らして「困難さの例や背景にあるもの」として整理した。それらから児童の目標を検討・設定をし、同じように自立活動の内容ごとに実際に行う指導や支援を検討した。その際に、系統立てて具体的に整理されている長崎自立活動研究会（2019）の自立活動学習内容要素表を参考にした。

それらを共有することができる個別の指導計画を作成し、それを基に支援を継続した結果、児童がどのように変容したかを、授業の取組や生活の様子をもとに考察する。

なお、A児の言語障害通級指導の担当が個別の指導計画を作成していたが、言語障害に対する自立活動や生活に関する指導・支援の内容が多かったため、本研究では、通常の学級での教科学習における指導や支援に特化した個別の指導計画を作成することとした。また、B児も発達障害通級指導教室で指導を受けているが、今年度からの入級であったため、個別の指導計画は作成途中であった。（令和7年7月末時点）

## 3 実践の結果と分析

(1) A児の実践

A児の実態把握は観察チーム3名で行った。観察からの情報を持ち寄り、簡易版実態把握図を作成した（図1）。

簡易版実態把握図で情報を収束させた結果、「健康の保持」「人間関係の形成」「身体の動き」「コミュニケーション」で困難さが見られた（表1）。

表1 A児の困難さの例や背景にあるもの

健康の保持	心理的安定	人間関係の形成	環境の把握	身体の動き	コミュニケーション
○生活リズムが崩れており、寝不足がある。 ☆保護者からのサポートが難しい。		○話し合いやグループ学習で人任せにしてしまう。 ☆友達の過剰な助けがある。 ○落書きや手遊びをしてしまう。		○学習中にうつ伏せになり、良い姿勢の保持が難しい。	○課題の時間が終わるのを待っている様子がある。 ○援助要求がない。

そこから、

- ① 課題に集中して取り組み、集中が途切れても簡単な支援で切り替えることができる。
- ② 自力でできることに取り組み、難しい場合は助けを求めて課題を解決しようとする。

という2つの目標を設定し、個別の指導計画を作成した(図2)。

実際の支援は、以下のように区分毎に整理して行った(表2)。

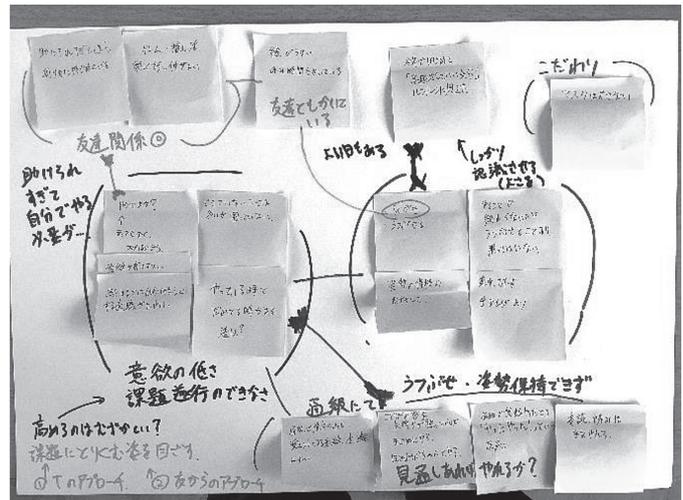


図1 A児の観察チームによる実態把握

表2 A児への支援方法

①健康の保持	②人間関係の形成	③身体の動き	④コミュニケーション
・早寝をし、調子の良さそうな時に声を掛け、良さを再確認させる。 ・単調な授業にせず、体を動かしたり、友達と話したりする活動をこまめに設ける。	・程よくサポートをしてくれる友達を隣にする。また、話し合いなどのグループでは、どんどん話を進める子とは別にし、普段からよく話す友達と組ませる。 ・授業や活動の見通しをもてるようにし、やるべきことを明確にする。	・姿勢が崩れた際は軽く肩を叩いて気づかせる。直った際や良い姿勢のタイミングで認める声掛けを行う。	・困った様子の場面を逃さずに捉え、その都度、援助要求の仕方を教える。できた場面で賞賛する。

A児に対する実践について、観察チームが7月後半と9月前半の姿を見取り、評価を行った。その結果、教科の学習に関連して以下のような変化や状態が確認された。

- ①授業で操作活動や話し合い活動をこまめに設定し、単調にならないように工夫した。また、隣の座席に「今ノート書くよ。」など、短い言葉で適度に声を掛けてくれる友達を配置した。さらに、学習の見通しをもてるよう、学習の流れを提示した(図3)。その結果、学習の板書を書ききれようになってきた。いまだ落書きは多いが学習に関係するイラストが多くなった(図4)。
- ②話し合い活動では、積極的に話し合いを進める児童とはグループを分け、普段からよく話す友達とグループを組んだ。最低限自分の考えを周りに共有することができた。その考えを教師が取り上げ、全体に向けて紹介したら照れくさそうにしながらも笑顔になっていた。
- ③うつ伏せた際に軽い接触で姿勢を直させ、良くなった際に認める声掛けを継続してきた。7月後半には授業中にうつ伏せることは減ってきており、週に1度あるかないかになった。しかし9月になり、週に1日程度、非常に眠たそうにしている日があり、起きていられない日があった。
- ④課題で苦戦していた際、担任からA児に「困ったら小さく手を上げてくれたらすぐに来るよ。ここが難しいですって言ってくれたらヒントをあげるね。」と声を掛けてきた。しかし、自発的な援助要求は確認できなかった。

「課題に集中して取り組み、集中が途切れても簡単な支援で切り替えることができる。」という目標に対して、集中が途切れた際も、教師や友達の簡単な声掛けで姿勢を正し、学習に戻れるようになってきた。「自力でできることに取

り組み、難しい場合は助けを求めて課題を解決しようとする。」という目標に対しては、自発的な援助要求は無かったが、小集団での話し合いで自発的に意見を述べる姿が確認された。

これらの変容から、姿勢が崩れた際は軽く肩を叩いて気づかせ、直った際や良い姿勢のタイミングで認める声掛けを行ったことや、サポートをしてくれる友達の配置や話し合いのグループ編成の工夫などの支援方法が有効だったと認められた。ただし、8月にA児の家庭での状況変化があり、この外的要因でA児の生活リズムが崩れたと思われる。観察チームの全員が7月後半までは学習意欲の高まりを感じていたが、夏休み明けの9月から週に1日程度、非常に眠そうにしている様子が見られ、学習意欲も7月後半に比べると下がっている様子が見られた。本人と話してみると、「夜、ほとんど眠れなかった。」と答えていた。

しかし、昨年度は全く手を付けなかった夏休みの課題を、保護者のサポートなく自力で8割程度取り組んできており、課題遂行についての意識は残っている様子も見られた。

今後、家庭環境の変化により、家庭からの支援が更に難しくなると予想されるため、学習準備や持ち物の確認についても支援を加えることとした。

個別の指導計画					
5年 A児					
実態把握 (令和7年5~6月)					
長所・良い姿		学習や生活で困っていること			
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 穏やかで友達に好かれている。</li> <li>・ 絵を描くことが好きで上手に描く。</li> <li>・ 通級の個別指導において、気持ちが整ってれば課題に集中して取り組み、賞賛にも反応する。</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 課題が終わらないのに机にうつ伏せることがあり、姿勢の保持が難しい。</li> <li>・ 課題に対して取り組むときもあるが、すぐに手が止まるときもあり、差がある。</li> <li>・ 課題が完遂できないが困っている様子が無い。</li> <li>・ 友達が助けてくれることに慣れてしまっている。</li> </ul>			
困難さの例や背景にあるもの					
健康の保持	心理的安定	人間関係の形成	環境の把握	身体の動き	コミュニケーション
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 生活リズムが崩れており、寝不足がある。</li> <li>・ 保護者からサポートが難しい。</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 話し合いやグループ学習で人任せにしてしまう。</li> <li>・ 友達との過剰な助けがある。</li> <li>・ 落書きや手遊びをしてしまう。</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 学習中にうつ伏せてしまい、良い姿勢の保持が難しい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 課題の時間が終わるのを待っている様子がある。自発的な援助要求をしない。</li> </ul>
目標					
① 課題に集中して取り組み、集中が途切れても簡単な支援で切り替えることができる。 ② 自力でできることに取り組み、難しい場合は助けを求めて課題を解決しようとする。					
目標到達のための教科学習での指導と支援					
健康の保持	心理的安定	人間関係の形成	環境の把握	身体の動き	コミュニケーション
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 早寝をし、調子の良さそうな時に声を掛け、良さを再確認させる。</li> <li>・ 単語を授業にせず、体を動かしたり、友達と話したりする活動をこまめに設ける。</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 程よくサポートしてくれる友達を隣にする。また、話し合いなどのグループでは、どんだん話を進める子とは別に、普段からよく話す友達と組ませる。</li> <li>・ 授業や活動の見直しをもうできるようにし、やるべきことを明確にする。</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 姿勢が崩れた際は軽く肩を叩いて気づかせる。直った際や良い姿勢のタイミングで認める声掛けを行う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 困った様子の場面を逃さずに捉え、その都度、援助要求の仕方を教える。できた場面で賞賛する。</li> </ul>
評価 令和7年7月末					
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 授業中にうつ伏せることは減ってきており、週に1度あるかないかになった。</li> <li>・ 学習の板書を書ききれようになった。まだまだ落書きが多いが学習に関連するイラストが多くなった。(米作りのイラストなど)</li> <li>・ 話し合い活動では、最低限自分の考えを周りに共有することができた。その考えを全体に向けて紹介したら照れくさそうにしながらも笑顔になっていた。</li> <li>・ 自発的な援助要求はほぼない。</li> </ul>					

図2 A児の個別の指導計画

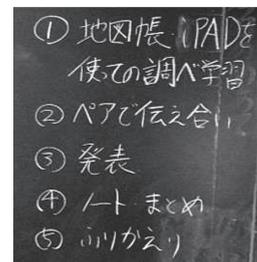


図3 学習の流れの提示例

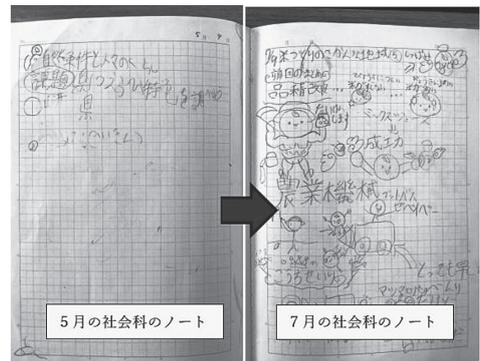


図4 A児のノートの変化

(2) B児への実践

B児の実態把握も観察チーム3名で実態把握を行った。情報を持ち寄り、簡易版実態把握図を作成した(図5)。

簡易版実態把握図で情報を収束させた結果、「健康の保持」「心理的安定」「人間関係の形成」「コミュニケーション」で困難さが見られた(表3)。

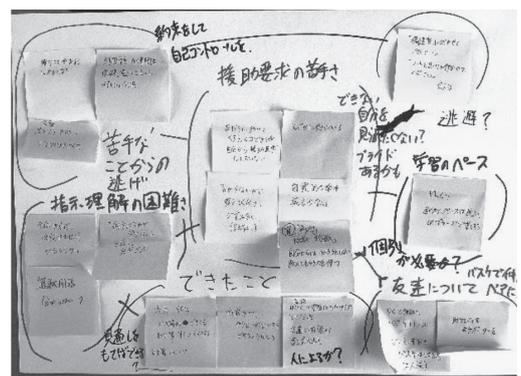


図5 B児の観察チームによる実態把握

表3 B児の困難さの例や背景にあるもの

健康の保持	心理的安定	人間関係の形成	環境の把握	身体の動き	コミュニケーション
○お腹が痛い、だるいと言い、保健室に行く。 ○平日の習い事で疲れると宿題ができない。	○「嫌だ」「できない」と思った際に、すぐに逃げようとする。 ☆プライドがあり、できない自分を見せたくない。	○自信を失っており、少し丁寧に取り組めばできることでも、「できない」「難しい」と判断し、やめてしまう。			○課題の時間が終わるのを待っている様子がある。 ○自発的な援助要求をしない。

そこから、

① 「難しい」「できない」と思ったことでも、教師や友達の支援を受け、取り掛かることができる。

② 自分の思いや困り感を、適切な方法で保護者や教師、友達に伝え、援助要求ができる。

という2つの目標を設定し、個別の指導計画を作成した(図6)。

実際の支援は、以下のように区分ごとに整理して行った(表4)。

表4 B児への支援方法

①健康の保持	②心理的安定	③人間関係の形成	④コミュニケーション
・保護者と相談の上、保健室で休み時間についてルールを決め、ルール内での休憩を認める。	・全体に「まず～をしよう」など、取り掛かりの具体的な声掛けを行う。 ・学習内容や流れを始めに提示し見通しをもたせる。 ・指示も板書を残したり、指示を可視化するカードなどを用いたりする。	・特に苦手な算数の学習で担任による個別指導を行い、自分のペースで課題に取り組めるようにし、成功体験を積みせる。 ・助け上手な友達を隣にする。	・個別指導の際に援助要求の練習を行う。 ・他の児童から援助要求や質問があった際に全体に向けて賞賛し、援助要求や質問をしやすい環境をつくる。

B児に対する実践について、観察チームが7月後半と9月前半の姿を見取り、評価を行った。その結果、教科の学習に関連して以下のような変化や状態が確認された。

① 母親と相談し、まずB児と「心が苦しくなったら保健室に行って休む。その際は担任か授業者に『苦しくなったので保健室に行かせてください。』と伝える。」という約束をした。この約束をすることで、朝、登校を渋っても、基本的には登校することができた。6月後半はほぼ毎日2～3時間ずつ、保健室に行った。しかし、算数の個別指導を始めたことで、約束を改めることとなった。B児の父親も心配し、B児と話し合ったことで、保健室の利用は1日1時間以内というルールに、本人も納得して変更した。また、担任とも話し合い、「○時まで休んだら教室に戻る」という自分なりの目標を養護助教諭と決めて休むという約束もすることができた。その結果、7月半ばの保健室利用が1日20分程度の利用と大きく減っている。さらに、9月には週の半分は保健室利用をしない日があるなど、学習からの逃避が減った。

② 教科担当が行う算数の授業で、担任との個別学習を期間限定で実施し、B児に負担の少ないペースで学習を進めた。算数の個別学習の振り返りで「少し分かるようになった。」と述べ、正答も増えた。また算数「小数のかけ算」の学習を終えた際には、「整数のかけ算と同じ計算をして、点(小数点)を動かすだけだから簡単だった。」と述べ、少し自信をつけた様子が見られた。9月の「図形の角」の学習では、自ら「皆と一緒にできそう。」と担任に伝え、全体の学習に参加できている。以下やり取りの例を示す。

実際のやり取り(7月 算数のかけ算、単元最後の振り返りにて)

T: 小数のかけ算の単元はこれで終わり、最後の問題も自分でできそう?

C: すこし分かるようになったよ。たぶんできると思う。

T: 本当? すごいね! 結構難しかったと思うけど。先生は苦手なところだよ。

C: でも先生、小数のかけ算って今までの計算の答えの点(小数点)の位置に気を付けられただけだよ。

T: そうか、自分なりにまとめていてすごいね。この単元の算数は嫌じゃなかった?

C: (少し悩んだ後) …うん。まあまあ。結構分かった。

③ 全体の学習でも、指示を板書したり、指示を可視化するカードを用いたりして、「今何をすればよいのか。」を分かりやすくした(図7)。授業からの離脱は減った。

- ④ 難しいことがあった際の援助要求の仕方を教えたり、全体の学習場面で、他の児童の援助要求の声を賞賛したりした。その結果、個別学習の場面や、養護教諭には、落ち着いて自分の苦しさや援助を求める言葉を表出できるようになってきた。
- ⑤ 積極的に手助けをしてくれる世話好きな女子児童を隣の席にしたが、B児本人が「友達から積極的に助けられることがストレス。」だと語り、手立ての失敗であった。その結果、話しやすい同性の友達と席を替えるという改善策を施した。

B児の「『難しい』『できない』と思ったことでも、教師や友達の支援を受け、取り掛かることができる。」という目標については、できる場面が増えたと評価した。「自分の思いや困り感を、適切な方法で保護者や教師、友達に伝え、援助要求ができる。」という目標についても、自発的な援助要求が見られるようになり、達成したと評価している。

観察チーム全員がB児の学習意欲の高まりと、困り感の緩和を認めた。特に算数の学習への不安感は減ってきている様子が見られる。また、保護者からは登校渋りの様子がなくなってきたという報告があった。

#### 4 まとめと今後の課題

本研究では、複数の教職員による簡易版実態把握図を用いた実態把握と、実態を自立活動の内容に照らして整理した個別の指導計画の作成により、2名の児童に概ねよい変容が見られる支援や手立てを行うことができた。

当然、行った全ての支援や手立てが有効であったわけではないが、それは個別の指導計画の更新に反映するために、必要な手順であると考えられる。

大切なのは、より正確な実態把握ができたことと、通常の学級担任や教科指導担当にとって、行う支援や手立てを考えることが容易になった実感があったということであろう。

そして、今回作成した個別の指導計画を継続して更新し、活用していくことで本研究の取組が児童に良い影響を与えられると考えられる。

また、本実践中、児童の教科学習における困り感が、知的能力の低さを原因とする場合、自立活動の視点をもった支援だけでは対応が難しいのではないかと感じた。

通常の学級の中には、発達障害と共に知的能力の低さがある児童も少なくない。そういった児童への支援方法について、今後も探っていく。

#### 5 引用・参考文献

- ・齊藤由美子：「多様な教育的ニーズに対応できる学校づくりに関する研究」, 2020.
- ・長崎自立活動研究会：「自立活動学習内容要素表」, 2019.
- ・西村恵：「コミュニケーション力の育成を目指した自立活動の指導の充実－複数人の教員による実態把握から作成した自立活動メニュー表の活用を通して－」, 2025.
- ・引場陽子：「小学校の発達障害通級指導教室指導者育成事業における研修プログラムの実施と有効性－個別の指導計画作成に焦点を当てて－」, 2025.
- ・文部科学省：「小学校学習指導要領」, 2017.
- ・文部科学省：「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について」, 2022.

個別の指導計画

5年 B児

実態把握 (令和7年6月)

長所・良い姿 ・同じ習い事の友達と仲が良く、友達関係の悩みはない。 ・唐句をつくる学習には前向きに取り組み、友達に相談する姿も見られた。(同じ習い事の友達) ・算数で、計算のやり方が分かると類似問題を進めることができた。	学習や生活で困っていること ・学習で分からないことがあっても静かに困っており、援助要求ができない。 ・苦手な教科や苦手な学習から逃げようとし、登校渋りや保健室に行くことがある。 ・全体での指示やそのときにやることが分からずにいる様子がある。学習のペースについていけない。 ・平日の習い事でとても疲れ、ストレスだと語った。
---	--

困難さの例や背景にあるもの

健康の保持	心理的安定	人間関係の形成	環境の把握	身体の動き	コミュニケーション
・お腹が痛い、だるいと言いつ、保健室に行く。 ・平日の習い事で疲れると音題が苦しい。	・「嫌だ」「できない」と思った際に、すぐに逃げようとする。 ・プライドがあり、できない自分を見せたくない。	・自信を失っており、少し丁寧に取組めばできることでも、「できない」「難しい」と判断し、やめしてしまう。			・課題の時間が終わるのを待っている様子がある。自発的な援助要求をしない。

目標

① 「難しい」「できない」と思ったことでも、教師や友達の支援を受け、取り掛かることができる。  
② 自分の思いや困り感を、適切な方法で保護者や教師、友達に伝え、援助要求ができる。

目標到達のための教科学習での指導と支援

健康の保持	心理的安定	人間関係の形成	環境の把握	身体の動き	コミュニケーション
・保護者と相談の上、保健室で休む時間についてルールを決め、ルール内で休憩を認める。	・全体に「まず～をしよう」など、取り掛かりの具体的な声掛けを行う。 ・学習内容や流れを始める前に提示し見通しをもたせる。 ・指示も取習を残したり、指示を可視化するカードなどを用いたりする。	・特に苦手な算数の学習で担任による個別指導を行い、自分のペースで課題に取り組むようにし、成功体験を積ませる。 ・助け上手な友達を隣にする。			・個別指導の際に援助要求の練習を行う。 ・他の児童から援助要求や質問があった際に全体に向けて賞賛し、援助要求や質問をしやすい環境をつくる。

評価 令和7年7月末

- ・6月半ばに比べ、7月半ばの保健室利用が大きく減っている。1日平均2～3時間の利用から1日20分程度の利用に減った。自分自身や養護教諭と2人で教室に居る時間を決めることができたようになった。
- ・算数の個別学習の振り返りで「少し分かるようになった」と述べていた。
- ・個別学習の場面や、養護教諭には、落ち着いて自分の苦しさや援助を求める言葉を表出できるようになってきた。
- ・友達から積極的に助けられることがストレスだと語り、手立ての失敗があった。席を替えた。

図6 B児の個別の指導計画



図7 指示カード